



KIZUNA
～想いは届け～

「絆」の文字：栗田佳代さん

「地域の中で幸せに生きる」を問う

no.1

「当たり前に生きることができている今日に感謝」
社福) 大府福祉会あけび苑管理者 平林政明氏

no.2

「地域共生社会について考える」
しらさぎケアホーム管理者 野呂大悟

特集

居宅介護のこれからを考える

株式会社ウォームス ヘルパーステーションまほろ

取締役 古田貴氏



写真：クリスマスイルミネーション「あま市文化の杜」にて

今年度も終わりに差し掛かり、また新たな年度がやってきます。今年度（令和4年度）のしらさぎケアホームを振り返ると、大きな節目の年であったようにも思います。大切な仲間との別れがあり、大きな悲しみを経験しました。そして、新たな仲間も加わることになりました。今改めて今年度を振り返ると同時に、ある人に言われた言葉を思い出しました。

「竹のようにしなやかに生きなさい。」

竹のように…、しなやかに…。考えさせられる日々でした。

竹は風が吹けば決してその風に逆らわず、雨が降れば滴る水とともに頭を垂れる。しかし、決して折れることはない。なぜなら、竹には「節」があるから。節は竹の強度を増すが、「強靭さ」ではなく、「しなやかさ」が折れない強さとなる。

人の人生もまた同じ。悲しみや苦しみはできれば避けていきたい。でも、そんな人生はあり得ないわけで…。ただし、その苦しみや悲しみにもいつか必ず節目がきます。その節目が自分の「節」となり、ありのままに生きる強さを手に入れていくのでしょうか。それが、「しなやかに生きる」ということなんでしょうか。

私たちの仕事は「命」と向き合うこと。そんなことを教えられたような気がします。

管理者 野呂大悟

当たり前前に生きることができている「今日」に感謝



平林 政明 氏

社会福祉法人大府福祉会
あけび苑 管理者



社会福祉法人大府福祉会HP

5月13日今年もまた「今日」がやってきました。

11年前の今日、悲しい出来事に立ち会い、生涯忘れてはならない日となった。ある尊い二人の命が消えた日。そして一人だけ残った命。自分に託された最後のメッセージはその命を「頼む」と。あまりに突然で、衝撃的で、無力感にかられ、あまりに・・・現在、その「頼む」に応えられているだろうか。

妻にガンで先立たれ、障がいのある子どもを二人抱えて暮らしてきたある方が、障がいのある息子を連れて命を絶った。もう一人の障がいのある娘には手をかけられなかったようで、彼は命が絶える前に「娘を頼む」と息絶え絶えに電話してきた。急いで彼の家に行ったが全ては間に合わなかった。

新聞記事にもなったのだが、決して不遇な境遇だけが自死の理由ではなかった。しかし周囲の多くが「障がいのある子どもを持つとやっぱり大変なんだ」と言っていたのが、彼や彼の子どもたちの人生を否定されたようで辛かった。自分もしばらく現場での衝撃と無力感で眠れぬ日が続いた。

こんなことがあったからこそ、人が生きることや、その人生の質・幸せについて考えてしまうことがある。そして、この出来事が今の仕事の原動力になっている部分でもある。障がいのある人やその家族がそれぞれ輝いて暮らせるように少しでもお手伝すること。それが私の仕事。

さて、今年も墓参りに行ってきた訳ですが、「当たり前前に生きることができている」ことに感謝しよう。自分の周りの全ての人の存在に感謝しよう。改めてそう思うのでした。

昨年の5月の中頃、あるメッセージが私の目に飛び込んできました。それは、私がお世話になり、尊敬する方のメッセージでした。決して長くはない文章ですが、とてもとても考えさせられました。今日がやってくることは当たり前ではない！だからこそ「感謝」に生きる。もっと生きたいと願ったが叶わなかった命との出会いを無駄にしてはいけません。そう強烈に問われているようです。
管理者 野呂

地域共生社会について考える

しらすぎケアホーム 管理者 野呂大悟



私（管理者の野呂）の実家は田舎の田舎。旧立田村（現愛西市）の西の果てにある小さなお寺です。周りは田畑ばかりで、小学生の時は村に信号機が1つだけ。通学も片道40分の道のりを通い、近くのコンビニは小学生だけでは到底行けるような距離ではありませんでした。

そんな田舎でのエピソード。通学路の途中に小さな墓地があり、その横に大きな穴が掘ってありました。イメージとしては、大きな落とし穴みたいな感じ。何だろうとは思っていましたが、どうやらそこは野辺送りの場。私が小学生のころまでは実際に使っていたそうです。大学生になると、ほとんどの葬儀が葬儀場で執り行われるようになりましたが、地元では時よりまだ自宅での葬儀がありました。村の誰かが亡くなると、地元の男性陣は通夜葬儀の段取りを話し合い、女性陣は食事やコショウ汁の支度をする。祭壇は役場から借りてきて、参列者の迎え入れる準備を整え、受付やら接待やらを村の人々が行うという、今の時代では考えられないほどの手間と時間を費やしていました。

要は、地域の方が亡くなると、亡くなられた方を中心に地域の方々が集まり、ご遺族や親せきとも膝を突き合わせ故人をしのび、さらには地域の事や自分たちの家族の事をあーだこーだと話をしながら、同じ釜の飯を食い、住民全員で送り出すことが当たり前であった昭和から平成初期の時代には、そんなコミュニティが存在していたのです。それから20年が過ぎ、地元も自宅での葬儀はなくなり、今ではコロナの影響も相まって地域の方が亡くなくても沙汰だけが送られてきて、集まる機会すらなくなっていきました。効率性・生産性の向上が求められる現代社会においては、葬儀においても効率性を重視した形式は間違っていないと思います。なおさら、個人情報が問われている今の社会においてはむしろその方がニーズ性が高いかもしれません。

前回の絆で少しだけ書かせていただいた重層的支援体制整備事業についてですが、福祉、特に障害福祉サービスに向けてなぜそのような考え方が生まれてきたのかを私たちはきちんと理解していく必要があるかと思っています。

これからは、超加速的に人口減少（少子高齢化）が進む時代背景と効率性や労働生産性がまだまだ低いと言われている日本では、おそらく周りの先進国に追いつけ追い越せで、ギアを上げてさらに便利で驚くような社会が展開されていくかもしれません。労働者が減るのであれば、AIが人間の仕事に置き換えられて、話す相手は人間ではなく機械になることもあるかもしれません。メタバース（コンピューター上に作られた3次元の仮想空間）に世界が置き換えられて、アバター（パソコン上に存在する自分の分身）としての自分が24時間365日何かしらのパフォーマンスを繰り広げている可能性もあります。

そんな社会や世界がもう目の前までやっています。私は、そんな世界が来ることは決して悪いことではないと思います。なぜなら、技術の進歩は、今までなかった可能性や選択肢を増やすこともあります。例えば、人間よりAIの方がよ

りデータ収集、情報整理、解析、分析に基づいた問題解決を論理的にかつ迅速に導いてくれるのであれば、どんどん活用すれば良いし、車の運転も人間より自動運転の方が安全であれば、コンピューターに運転を任せ、私は違うことに時間や能力を割くことで新たなものが生み出される可能性もあります。どんどん人間の役割を機械に代替することで、その分新たな可能性を見出していける時間や能力が個々人において開花されるかもしれません。まさに、機械化が発展していく事で、ますます利便性と生産性が向上し快適な生活が待っているかもしれません。

しかし、それだけが人を豊かにしたり、幸せにするかというと、それはイコールではないとも思います。ことさら、福祉においては、機械では決して代替できない、人間としての「感性」がとても大切になっていきます。いくら、情報を効率的に処理・整理ができたとしても、その情報に対して感動したり、心が揺さぶられたり、嬉しくなったり、悲しくなったり、という感覚。一人ひとりの異なる感性が、時にはぶつかり、時には共鳴し合い、育まれていくことは、人としての存在意義そのものだと思います。

ハーバード大学の75年にも及ぶ「人の幸福とは何か？」の研究結果について、人が幸せであると感じる要素は、快適さや経済的豊かさ、名誉や学歴、社会的地位などではなく、「信頼し、尊重し合える人が私にはいるかどうかである」と結論づけています。要は、信頼出来て安心できる人の存在が「幸せだ」と人間は感じるのだそうです（人数は関係なく1人でもそのような存在がいるかどうか）。

「福祉」とは、「福」も「祉」も「幸せ」という意味があります。その本質は、福祉サービスを受ける側のみが「幸せ」と感じるのではなく、そこに関わる人々、そして、この社会で生活するすべての人々が「幸せ」と感じるが大前提であるとずっと学んできました。そう考えた時、昭和から平成初期に経験した、今思えば効率的の真逆をいく非効率的の極みと思うような場と、家族の枠組みを超えた地域の方々との「地縁」をどうしても思い出してしまいます。これからの未来、効率性重視、生産性重視のみの社会に向かってしまえば、人々の分断はさらに加速化し、血縁、社縁、地縁は今以上に希薄化して、孤独化や孤立化が増し、さらなる生きづらさを抱える方々を産み落とし続ける社会になってしまう事が危惧されます。

重層的支援体制整備事業の創設の背景はそんな危機感があるかもしれません。重層的支援体制整備には、官民協働において、再び人と人が出会い、繋がり合い、お互いが必要な存在だと認め合える社会を構築するために、新たな縁（第4の縁）を生み出していくような地域づくりが仕組化されています。そのような地域づくりを担うことは、行政機関はもちろんですが、常に目の前の人の「幸せ」を問うてきた私たち福祉に関わる人だからこそその「使命」と感じます。

地域の誰もが支え・支えられる役割を担う社会を理想郷として、すぐに到達することは間違いのない労働人口減による働き手不足と、加速的に進むかもしれない社会の分断に対する打開策として投げられた重層的支援体制整備事業という矢を、きちんと理想郷に突き刺せるかどうかは、現場で今すでに働いている私たち、地域、法人、事業所、一個人で真剣に考え、実践していくかどうにかかっていると思います。

今もこれからも、どんな人であっても「幸せ」になる権利を守るために！



古田 貴（たかし）氏

株式会社ウォームス

ヘルパーステーションまほろ 取締役

〇はじめに

永美福社会、しらさぎケアホームの関係者の皆様、株式会社ウォームスの古田と申します。昨年7月に弊社代表であり友人の福井とともに愛知県みよし市に会社を設立し、昨年9月に「ヘルパーステーションまほろ」を開設いたしました。

私たちは、“介護”をする会社ではなく、介護“も”する会社。私たちが生活に関わらせていただくことで、“今”目の前の人たちが少しでも笑顔になってもらうこと。そして、その方たちの生活が少しでも豊かになっていくこと。その小さな積み重ねが必ずこの先の明るい未来や大きな感動と喜びを生み出し、それが人生を楽しむことに繋がることを信じ、『人生を遊ぼう』を基本理念とし、自分たち(社員)も人生を楽しむ、利用者様、ご家族様も人生を楽しむ、それぞれが人生の主役で、障害などに関係なく人として、人生を遊ぼうと、自分たちが本当にやりたいことを実現するために会社をスタートしました。事業所名の「まほろ」には、「心地よいところ」という日本の古語（まほろば）に由来し、関わらせていただくすべての人たちの心地よい環境や日々の生活の「ば」に加えていただき、お手伝いをしたいとの想いを事業所名にこめました。

みよし市を拠点に仕事をさせていただく中、素晴らしい方との出会いが沢山ありました。同市の社会福祉法人あさみどりの風の皆様とご一緒する中、永美福社会さんも参加される4法人合同研修での講師のお話を頂き、偶然でしたが、友人であった水野大蔵さんと知り合い一緒に発表させて頂きました。その後も管理者の野呂さんとご一緒させていただく機会にも恵まれまして、そのようなご縁から今回機関紙の記事をとのお話しを頂きました。

学者や有資格者でもありませんので、学術的や実践的なことはお話し出来ませんが、自分が感じていること、会社・事業所としてこれから実現したいことを考えさせていただく良い機会に、また、事務担当をしていますので今後の制度や課題についても考える機会となればと思いお引き受けしました。



○「しらすぎケアホーム」を見学して

機関紙の寄稿にあたって「しらすぎケアホーム」の見学をお願いし、過日水野大蔵サービス管理責任者にご案内して頂きました。

5棟30名定員のグループホームが、障がいのある方お一人お一人が人生の幅を広げ、可能性を拓いていく暮らしの場として過ごすことが出来るよう、保護者の皆様と協力しながら運営されていること、障害の重度化・高齢化に伴う諸課題、365日24時間体制の支援に向けた課題等をお聞かせいただくとともに、暮らしの中で楽しみを増やす、選択肢を増やしていくこと、地域での繋がりを大切にしていくことで、より良い暮らしの場を創っていききたいという水野さんの熱い想いに大変感銘を受けました。

○居宅介護の事業所を経営しての現状

ヘルパーステーションまほろは、現在、障がいのある方への在宅での支援のために、居宅介護・重度訪問介護・同行援護、外出等を目的とした移動支援の事業を、また、高齢者への介護を行う訪問介護の事業を実施し、みよし市を中心に70名超える方に契約・利用をいただいています。

私も代表の福井も従業者として現場に入らせていただく中、他人様のご家庭に入る支援の大変さを感じながらも、利用者一人一人のバックボーンを知り支援する中で伝える感謝や喜びの気持ち、ご本人時にご家族からお聞きする悩みなどをダイレクトに感じる事の出来る居宅介護は非常にやりがいのある仕事と感じています。

経営面では、体調不良やコロナ渦による利用のキャンセルにより、収入が減少する事もありましたが、2年目の今年度は何とか黒字経営を達成する見込みです。これからもスタッフ7名の団結力で一つ一つの支援を大事にしながら進んでいきたいと思えます。

○居宅介護のこれから

地域の中で暮らしていく上での居宅介護事業の役割は非常に大きいですし、多様化する社会の変化・課題に対応を求められていくと思えます。

例えば、弊社も当初は介護保険サービスを行う予定は無かったのですが、障害を持つ利用者の高齢のお母さんの支援の依頼を頂き、制度を調べると、地域共生社会実現のための施策の一環として「共生型訪問介護」という事業があり、障害福祉サービスの居宅介護の基準を基本に介護保険の訪問介護の指定を受けることが出来るもので、申請・指定を受けそのお声に対応させて頂くことが出来ました。

また、「医療的ケア児支援法」が2021年に制定されました。これは「医療的ケア児」を法律上できちんと定義し、国や地方自治体が医療的ケア児の支援を行う責務を負うことを初めて明文化した法律です。医療的ケア児及びその家族の生活を社会全体で支援しなければならないことを法の理念とし、具体的な支援拡充として、各自治体は、医療的ケア児が家族の付添いなしで希望する学校・保育園等・施設に通えるように、保健師、助産師、看護師や准看護師、またはたんの吸引等を行うことができる保育士や保育教諭、介護福祉士等の配置を行うものとしています。また、都道府県ごとに「医療的ケア児支援センター」を設立することが義務付けられており、医療的ケア児とその家族が困りごとがあった際には、ワンストップで対応できるようになることが期待されている。愛知県では圏域・市区町村などで整備を進めています。

弊社のスタッフ全員は介護福祉士で喀痰吸引の資格を有しており、既に約10名の医療的ケア児の支援に入らせて頂いています。今後も医療的ケア児への支援の拡充とともに、お母様・ご家族に対してもサービスを提供できたらと思っています。また、昨今話題となっているヤングケアラーへの対応も重要な課題です。ヤングケアラーとは、本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っている子どものこと。責任や負担の重さにより、学業や友人関係などに影響が出てしまうことが懸念されています。既に先進的な地域では、行政・学校・相談員等が連携し、該当の家庭にへ速やかヘルパーが派遣される制度が実施されています。今後は行政等と協働しながら対応をしていけたらと思っています。

◎おわりに

多様化・複雑化する社会の中では様々な課題あります。国は誰もが役割を持って暮らしていける「地域共生社会」の実現を目指しています。また、SDGsの理念でもある、「誰一人取り残さない」社会が世界の潮流となれば素晴らしい事です。

障害福祉の分野では、上記のような複雑な課題に対応するため、重層型相談支援体制の構築を目指しています。これは、今までの支援体制だけでは、人びとが持つ様々なニーズへの対応が困難になっている中、一方で、地域の様々な動きに目を向けると、人と人とのつながりや参加の機会を生み育む多様な活動を通して、これまでの共同体とは異なる新たな縁が生まれています。その縁を通じて、特定の課題の解決に繋がる活動もあります。

居宅介護の在宅の支援は、施設などでの支援を「面」とするなら、小さな「点」かもしれません。しかし、今まで述べた諸課題や今後の制度では、この小さな「点」が結びついたことで生まれる繋がりが大きな可能性を秘めていると感じています。ともあれ、「共生社会の実現」と口先だけの議論は簡単です。新たな社会づくりには、現実のレベルで差別などの差異を乗り越えて社会全体を共生社会へとリードしていけるかどうか肝要だと思います。

私の大好きな先哲の箴言に「地面に倒れた人間は、返ってその地面を押さえて起ちあがる」との言葉があります。コロナ渦もそうでしたし、新たな社会の課題や不安といった危機を危機だけで終わらせず、そこから立ち上がって新たな時代を切り開くことに、人間の真価はあると確信するものです。私は、少人数の幸せを実現していくことはきっと社会全体の幸せに繋がる、小さな幸せが大きな幸せに繋がる仕事と信じてこの仕事をしています。

これからも、永美福祉会の皆様と同じ想いでご一緒に仕事ができることを楽しみにしています。拙い文章でしたが、最後までお読み頂きありがとうございました。

「ひるまるしえ冬」

蛭間学区の「ひるまのまるひ委員会」に参画して1年が経とうとしています。蛭間地区の方々はとてもアットホーム感があり、温かさに満ちています。そんな地区で年4回開催されている「ひるまるしえ」に今回は焼き芋とジュース販売で参加。岐阜から高校1年生がボランティアに来てくださったり、地域の方と一緒に販売しながら、多くの繋がりが生まれました！！次回は6月11日（日）の予定！次は暖かいので、利用者さんとも販売しようと思います！



ボラさんや地域の方と販売！

勝手に！

おすすめ書籍紹介



今号から毎回、色々な人の「おすすめ」書籍を勝手に紹介したいと思います。今号は管理者のおすすめ「ケーキの切れない非行少年たち」です。全国の少年院の実情が漫画を通してリアルに描かれています。少年院に入院する非行少年の一定数は知的障害や発達障害の傾向があり、社会でそれがきちんと理解されず生きづらさを抱え、何かしらの犯罪に手を染めてしまう。そのリアルな社会問題がほぼノンフィクションで描かれています。

原作：宮口幸治 漫画：鈴木マサカズ 新潮社出版

編集後記

管理者になり丸3年が経とうとしています。年々、私の管理者としての資質のなさが身に染みて感じてしまう今日この頃…。「そんなことないですよ～」と言われたいがためにそんなこと書いているのではなく、真剣にそう思っています。しかし、その「資質の無さ」という自覚が、意外と力になったりもしています。

ここ最近、コロナも落ち着きはじめ、他法人の方や他業種の方々とお酒を飲む機会も増えてきました。お酒は嫌いではないので、楽しい酒の席！と思いきや、酒飲みながら様々な情報の交換をしていると、自らの知識の無さや無知さや考えの薄さに気づかされ、酒の酔いも交じり合っ、何とも言えない無力感というか失望感に襲われることがあります、楽しい酒の席！のはずが、なぜか凹みながら帰るという謎の現象が続いています（汗）。

しかし凹みながらも、管理者であるからこそ「学ぶ」ということに貪欲であり続けなければならないという思いがメラメラと湧き上がります。管理者であると、研修は現場のスタッフに受けてもらうよう段取りして…、法人研修では管理者は企画や内容の報告を受けて当日はただただ見守る立場を貫いて、何だか学んだ気になっているという勘違い野郎になっていても、立場的に誰からも指摘をされないという悪循環が相まって…。冷静に振り返ってみると「やべえ、俺って何も学ぼうとしてないじゃん」という事に気づいたときには、周りの人たちは一歩も二歩も先へ進んでいる。それでいて、現場のスタッフにやれ「虐待防止だー！」とか、「意思決定支援だー！」って真顔で言っていると想像するだけで、恥ずかしくて顔が赤くなってしまいます。

この絆も、様々な人に原稿を書いていただくという大変に面倒な作業をお願いしているわけですが、みなさん快く受けてくださることを心から感謝しております。これも、1つ「学ぶ」に繋がる重要な要素。絆を見て、興味を持ち、自らでさらに深く理解してスキルを獲得するのは、誰でもなく「私」であるという思いを持ちながら、これからも、私の無茶ぶりとスキル獲得にお付き合いくださいませm(__)m

管理者 野呂大悟